アタッチメントにおける安心の基地表象とアイデンティティの探求の関連

繁田 京ノ輔

問題と目的

他者との間で形成される強い情緒的絆であるアタッチメントの核となる機能は“安心の基地”と呼ばれるアタッチメント対象への接近によるネガティブ情動の低減，外界の探索の促進である(Bowlby,1969)。この安心の基地は青年期ごろまでに，表象としてこころの中に保持される (Bowlby, 1973, 1980)。この安心の基地表象により物理的な接近を伴わずネガティブ情動の制御・探索が可能になる (Bowlby, 1969)。

この安心の基地はアイデンティティ・ステイタスの探求との関連が予測され研究が行われている (Mackinnon & Marcia, 2002; Samuolis, Layburn, &Schiaffino,2001)。アイデンティティ・ステイタスとは，探求・コミットメントの 2 次元から説明されるアイデンティティの状態であり，探求はアイデンティティの事柄を問い直し探求すること，コミットメントは自分が積極的に傾倒できるという感覚である。この探求が外界への探索と同様に安定的なアタッチメントにより促進されると考えられる。しかし，これまでの研究では関連するという結果は得られていない (Arseth et al., 2009)。そこでより詳細にまた他の角度から探求をとらえアタッチメントとの関連を検討する必要がある。

より詳細に探求を測定する方法に広い探求，深い探求，反芻的探求に区別する方法がある。広い探求とはコミットメントする事柄について多くの可能性について考える過程であり，深い探求とは選択された特定のコミットメントする事柄について多様な視点から考える過程である (Luyckx, Goossens, & Soenens, 2006)。反芻的探求は不安の高い自己反芻的思考に基づく不適応的な過程である (Luyckx, Schwartz, Berzonsky, Soenens, Vansteenkiste, Smits, & Goossens，2008)。深い探求は一度選択した事柄についての探求であり事柄にコミットメントできないときには広い探求よりも脅威と言える。そのため安心の基地表象と広い探求でなく深い探求との関連が考えられる。また不適切な探求と関連するだろう不安定な表象は反芻的探求との関連が考えられる。

また別の角度から探求をとらえる方法にナラティブ・アプローチを用いた方法がある。ナラティブ・アプローチとは青年期において自分の人生に関するストーリーの構築によりアイデンティティを形成するという理論 (McAdams, & McLean, 2013) に基づく手法である。このナラティブ・アプローチを用いることで，過去の経験から得た教訓や学びから現在の自己の側面について行われている探求をとらえることができる。安定した安心の基地表象を持つ個人はネガティブ情動を制御できるため自己の重要な体験から自己に関するポジティブな探求を行い，反対に不安定な表象を持つ個人はネガティブな情動が抑制されず自己に関するネガティブな探求が行われると考えられる。

以上より本研究の目的の 1 つ目は安心の基地表象と広い探求，深い探求，反芻的探求との関連の検討である。安心の基地表象と広い探求は相関しないが深い探求は正の相関を示す，また反芻的探求とは負の相関を示すと考えられる。本研究の目的の 2 つ目は，安心の基地表象とナラティブ・アプローチにおける探求との関連の検討である。アタッチメントの安心の基地表象とポジティブな探求は正の相関を示し，ネガティブな探求は負の相関を示すと考えられる。

方法

参加者　広島大学の学生 49 名。男性が 22 名，平均年齢は 21.16 歳 (*SD*=1.11)。参加者全員が血のつながった母親がいると回答した。父親に関して，

44 名が血のつながった父親がいると回答，2 名が血のつながらない父親がいると回答，3 名が父親はいないと回答した。

アタッチメントの測定　アタッチメントの測定に Attachment Script Assessment (Waters, 2012; Umemura et al, 2018) を用いた。これは 12 単語の刺激語群を用いて物語を作成する構造化面接である。物語から両親に対しどれほど安心の基地表象が表れているか母親表象得点と父親表象得点として 7 件法で評定した。

多次元アイデンティティ発達尺度における質問紙調査　広い探求，深い探求，反芻的探求の測定に，多次元アイデンティティ発達尺度 (Luyckx, Schwartz, Berzonsky, Soenens, Vansteenkiste, Smits, & Goossens, 2008) の日本語版 (中間ら, 2014) を用いた。この尺度は 25 項目を 5 件法で回答し，コミットメント形成，コミットメントとの同一化，広い探求，深い探求，反芻的探求の 5 因子を測定できる。

自己定義的記憶課題　本研究では自己定義的記憶を用いた手法を用い，ナラティブ・アプローチにおける探求を評定した。自己定義的記憶は，個人的に重要な印象深い記憶で現在の自分に強く影響を与えるものと定義される (Singer & Moffit, 1991/1992)。本研究では Thorne, McLean., & Lawrence (2004) の記述式質問紙，およびその日本語版 (船越，2015) を参考に自由記述課題を作成し実施し，個人につき 3 つの自己定義的記憶に関する語りを得た。

得た語りから評定するナラティブ・アプローチにおける探求の指標が Meaning making である。Meaning making は語り手が述べた過去の経験を様々な幅広い自己の側面へ結びつけるような記述である (McLean & Pratt, 2006)。評定には McLean et al. (2017) の作成した評定マニュアルを使用し，Positive meaning making (以下，PM) と Negative meaning making (以下，NM) のそれぞれについて，4 件法で評価した。

結果と考察

アタッチメントとステイタス・アプローチにおける探求の関連　相関分析，および年齢と血のつながった父親の有無を統制した偏相関分析の結果，母親・父親表象得点と広い探求，深い探求，反芻的探求において有意な差はみられなかった (Table 1)。この結果から，アタッチメントと広い探究，深い探求に関わらず関連を示さないということが明らかになった。また反芻的探求に相関がなかった理由として，親とのアタッチメントが不安定な場合でも友人や恋人などとのアタッチメントが安定していた場合には不適切な探求が行われない可能性が考えられる。

アタッチメントとナラティブ・アプローチにおける探求の関連　相関分析，および年齢，血のつながった父親の有無を統制した偏相関分析の結果，母親･父親表象得点が高いほど PM も高かったが，NM においては有意な差はみられなかった (Table 1)。したがって，安定した安心の基地表象は自己のポジティブな側面の探求につながるということが示唆された。一方，不安定なアタッチメントとナラティブ・アプローチにおけるネガティブな探求は関連しないことについて，目的 1 における反芻的探求と同様に親ではない関係におけるアタッチメントの影響が考えられる。

(指導教員：梅村　比丘)

Table 1
各指標間の相関分析（下段），および年齢と血のつながった父親の有無を統制した偏相関分析の結果（上段）

	母親表象得点	父親表象得点	コミットメントの形成	コミットメントの同一化	広い探求	深い探求	反芻的探求	Positive meaning making	Negative meaning making
母親表象得点		.608 **	.052	.128	.070	.136	.138	.299 *	-.059
父親表象得点	.647 **		.178	.086	-.098	-.068	.091	.334 *	.156
コミットメントの形成	.016	.148		.529 **	.302 *	.277 +	-.623	.077	.038
コミットメントの同一化	.011	-.014	.602 **		.330 *	.230	-.341	.254 +	-.174
広い探求	.058	-.073	.383 **	.387 **		.410 **	-.049	.025	-.158
深い探求	.115	-.071	.295 *	.251 +	.420 **		.006	-.311 *	.104
反芻的探求	.168	.122	-.600 **	-.362 *	-.070	-.007		-.158	.159
Positive meaning making	.300 *	.326 *	.043	.186	.009	-.316 *	-.146		-.131
Negative meaning making	.000	.213	.053	-.175	-.126	.102	.171	-.122	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$